

国籍が異なる未知の若者同士が親密になる 条件についての研究 —留学生が行くSDGs旅行BENTO JOURNEY—

Research on the Conditions for Building Intimacy among
Unacquainted Young People of Different Nationalities:
SDGs Trips “BENTO JOURNEY” for International Students

加 来 翔 人*

藤 村 風 音**

グエン・ホアン・ロン***

Syoto KAKU,

Kazane FUJIMURA

and Nguyen Hoang Longa

1 はじめに

1-1 背景

現在、日本へ留学する外国人は、年々増加傾向にある。その背景にある「留学生30万人計画」は、アジア、世界の間のヒト・モノ・カネ、情報の流れを拡大する「グローバル戦略」を展開する一環として、2020年を目途に30万人の留学生受入れを目指し2008年に策定されている。外国人の受入れが促進される一方で、来日した外国人が日本社会に溶け込めるようさまざまな取り組みが行われている。文部科学省は2021年3月30日、「外国人留学生在籍状況調

* ** *** いずれも令和3年度現代ビジネス学部地域経済学科卒業生。

査」および「日本人の海外留学者数」等について公表した。2020年5月1日時点の外国人留学生数は27万9,597人で前年（2019年）より10.4%減。新型コロナウイルス感染症による影響が顕著に現れた。留学生数の多い国と地域は、中国12万1,845人（対前年比2,591人減）、ベトナム6万2,233人（同1万1,156人減）、ネパール2万4,002人（同2,306人減）、韓国1万5,785人（同2,553人減）、台湾7,088人（同2,496人減）等。減少幅に開きはあるものの、各国すべて前年より留学生数が減少した。また、アルバイトをしながら、学費や生活費を自己負担しなければならない留学生が多いゆえに暇な時間が少なく、留学生が日本人学生と交流する機会が減り、勉強や生活のことを相談できる親しい友人がいいると考えられる。来日して、一人暮らしをしている留学生が多いことから、留学生それぞれが抱えている課題を解決できていないのが現状である。伊藤・比留間（2019）の、留学生131名に対して行ったアンケートによると、留学生の79%がアルバイトに従事している。さらに、志甫（2015）は、日本語教育機関に所属している留学生の多くは、週20時間以上もアルバイトに費やしていると述べている。アルバイトの目的は日本での生活費用を稼ぐためとのことだ。しかし、まだ日本に来て間もない日本語教育機関の留学生がアルバイトと日本語の習得を両立させることは難しく、さらに、自分から積極的に話しかけて日本人の友人を作ることは非常に難しいのではないかと考えることができる。

森尾（2018）の論文によると日本に留学する外国人学生にとって、彼らが渡日直後から経験する日本語、日本での生活様式、日本の社会は、母国とは違った環境での新たなスタートを意識させると同時に、「自分はやっていけるのだろうか」と戸惑いと不安をかき立てるものである。このような不安を少なくするためには事前の情報収集が効果的であり、昨今ではインターネットの普及により、従前のテキストや写真による情報のみならず、動画やSNSによるリアルタイムかつインタラクティブな情報収集手段が活用されている。しかしながら、インターネット上の情報は自分にとって必要なものがどこにあるのかを見つける段階で苦勞することも少なくない。そこで、親しくなった日本人の友達

がいれば、留学生を取り巻く課題を一緒に解決でき、不安なことがあれば、すぐに相談できると考えられる。このことは、高井(1994)も指摘しており、留学生にとって日本人の友人を持つことは、学習面や精神面において様々なサポートが得られ、充実した留学生活を送る上で重要であると述べている。そこで、留学生が国籍の異なる日本人とどのようにしたら、親しくなることができるのかについての疑問を紐解いていく。

1-2 目的

本研究では、「国籍が異なる未知の若者同士が親密になる条件を明らかにすること」を目的として研究を進める。

田中(2003)や、横田(1991b)の発表によると、留学生は、言葉や文化の違いから日本人学生となかなか友人になることができないと言われている。また、留学生の多くは、同国人とのつながりが強いと指摘されている。異国の人と関わらない理由は、主に言語を含む文化的な差異であり、その差異が留学生と日本人の意思疎通を阻み、友人関係を構築する際に、大きな障害となっていると考えられる。しかし逆に、これらの結果は、留学生と日本人が文化的差異を乗り越えて、交流を深めていく機会、つまり「文化間距離」を縮める機会があれば、国籍が異なる人同士における親密化を促し親しい友人になれる可能性があると言い換えることができる。

留学生にとって、困った時に相談相手となる日本人の友人がいたら、現地で暮らす日本人の的確なアドバイスを得ることができ、自身にとって必要な情報も正確に獲得できる力もつけることが出来るだろう。その結果、留学生活での悩みや不安は減少すると考えられる。さらに、親しい日本の友人がいない留学生と比べると、不安や問題が無くなる以上に、日本語能力が高まったり、自由な時間でより多くの日本の文化に触れたりすることができ、豊かな留学生活を送ることができると期待する。以上のことから、本研究では、留学生が日本で、面識のない未知の日本人と親しくなり、様々な不安を克服して、充実した

留学生生活を送る一助となることを目指す。

そのために、「国籍が異なる未知の若者同士が親密になる条件を明らかにすること」を目的として研究を進める。

1-3 論文の構成

1では、留學生が抱える問題を背景に、研究の目的を決めた。研究の目的を決定するため留學生が日本での様々な不安を克服し充実した留學生生活を送るために必要な条件「国籍が異なる未知の若者同士が親密になる条件を明らかにすること」を目的として研究を進める。

2では、留學生と日本人の交友関係に関する先行研究を概観し、交友関係の親密化に必要な条件を整理したうえで、留學生が抱える具体的な課題や留學生と日本人の価値観、交友関係の条件を明らかにする。

3では、留學生と日本人の自己開示と友人関係について、同国間と国籍が異なる人同士では自己開示の程度が異なることを先行研究から明らかにする。

4では、仮説を検証していく。先行研究で明らかになった、人と人との親密になる条件をもとに、留學生と日本人でも同じような条件で親密化が図られるかを段階別に検証する。

5では、観察法を含む、3段階の調査を独自に行い、それぞれで、親密化が図られた場面にどのような条件があったかを精査する。

6では、結論として、先行研究、観察方法、独自調査から、仮説の妥当性を述べる。また、筆者らが遂行した北九州市での実証ツアーの企画を、留學生的側面、SDGsなどの目標的側面、観光的側面の観点から考察し、企画の社会的意義についても言及する。

最後に、7では、今後の展望についてまとめた。国籍が異なる人同士が親密になる条件についての研究が十分になされていないこと、日本人同士が親しくなる条件をもとに、留學生との親密化について研究を進めたことについての反省と、新たな発見についてまとめた。

2 先行研究

2-1 留学生と日本人の意思

ここでは、留学生と日本人の交友関係に関する先行研究を概観し交友関係の親密化に必要な条件を整理する。

まず、留学生と日本人が互いに交友関係を築きたいと考えているのかについてだが、平野・田島(2017)の研究によると、「日本人の友達が欲しいか」という設問に対し、留学生の56%が「友達が欲しい」、17%が「少し欲しい」、27%が「どちらでもない」と回答している。これに対し、梶原(2020)の調査では「今後、外国人留学生と友達になりたいか」という設問に対し、日本人学生の48.8%が「友達になりたい」、36.3%が「どちらかと言うと友達になりたい」、15%「関心がない」、と回答している。

つまり、留学生の73%が日本人との交友関係に興味を示しており、85%の日本人が留学生との交友関係に興味を示しているといえる。

久野(2011)が留学生を対象に行った「相談相手の有無に関するアンケート調査」によると、約8割の留学生に相談相手がいることが明らかになっている。ところが、「相談相手」として最も多かったのは「同国の留学生」、次いで「祖国の家族」であり、「日本人学生」と回答した者は0%だった。田中(2003)の研究からも、留学生と日本人が交友関係を深めるために越えなければならない、言語や文化の壁があることが明らかになっている。留学生が「日本人学生」と親密な関係を築くことは、かなりの困難が伴うと考えられる。ビザの更新や就職活動などは、留学生同士で相談したほうが解決策も見出しやすいが、日本の習慣、文化への理解を深めていくには、気軽に相談ができる日本人の友人を持つことが充実した留学生活を送るには最も有益であると言えよう。現に、交友関係を築く上で重要な自己開示の場でも留学生と日本人の間には壁が見える。

横田(1991a)は留学生と日本人学生の交友関係を自己開示から紐解くため

留学生7名、日本人23名にアンケートを行った。

自己開示は大きく分けて、勉強の話や将来についてなどを開示する「志向的領域」と、異性や家庭、性について開示する「関係的領域」2つに分ける事が出来る。

横田が行った調査によると、日本人と留学生では自己開示の内容に違いが見られた。

まず、留学生、日本人学生に「最も親しい友人と話す内容」を聞いた。日本人は、趣味や異性の話が多かったが、留学生は、勉強や目標について話しているケースが多く見受けられた。日本人間では「関係的領域」の話題が持ち出されやすい。そのような話題は、タテマエでなくホンネの話になりやすく、話し方次第では緊張感を逡巡しやすいものと考えられている。つまり、「関係的領域」は「志向的領域」よりも交友関係の発展に期待が出来る。

ところが、留学生は、留学と関係の深い「志向的領域」の話題が中心となる。その中で個人的な意見交換を行おうとするので、関係的領域における日本人の開示には相互性を示さないとされている。また、平井（1999）の研究によると日本人の性格には「自分たちと直接関係のないことに無関心である」や「恥ずかしがりやである」などの特徴があることがあきらかになっていることから日本人から発信するコミュニケーションの回数が少ないことも日本人と留学生の自己開示が促進されない原因と考えられる。

一方、山川（2013）の、「寮に住む留学生と日本人の交友関係構築に関する事例研究」によると、ルールの共有（呼び名、役割分担など）、空間の共有（部屋、キッチンなど）、時間の共有（部屋での生活、食事作り）と言う3つが調和された環境の中で寮生活を送ることで「留学生と日本人」から「友人同士」と言う関係に変化していく事が明らかになっている。

2-2 ベトナム人留学生の意識

研究の背景でも述べたように、日本政府が掲げる留学生30万人計画に伴い、

日本に留学する外国人は年々増加傾向にあった。

(独) 日本学生支援機構は、毎年、国内の高等教育機関等における外国人留学生の在籍状況などを調査している。この調査によると、2018年5月1日での外国人留学生数は298,980人であり、最も留学生数の多い国は中国114,950人(対前年比7,690人増)で、次いで、ベトナム72,354人(対前年比10,683人増)であることが明らかになっている。前年比の増加率からみると、中国人よりもベトナム人のほうが3000人も増えている。2021年現在は新型コロナウイルスの影響により、ベトナム人留学生数は1万人以上減少しているが、新型コロナウイルス終息後、留学生数は再び7万人台に戻ると予想して、本研究では今後、増加が見込まれるベトナム人留学生を対象とし、研究を進めていく。

ベトナム人同士の会話では、度々、「給料」や「家族」の話など、日本人同士では遠慮して聞けないことや、相手に不快な思いを与えると懸念される話題が登場するが、留学生は、十分に日本の文化を理解したうえで話をしないと相手に不快な思いをさせてしまうと考えため日本人とのコミュニケーションを避ける傾向がある。「日本人と仲良くなれるが、深い関係を築くまでは難しい」と考える留学生も少なくないことから、国籍の異なる人同士が親しくなる条件を探索する研究の意義は大いにあるといえる。

2-3 交友条件

交友関係の親密化に必要な条件を明らかにするために社会心理学の側面から親密化に有益な条件を明らかにする。

第1に、高坂・池田ら(2011)は、友人関係が親密になるほど、「特性の共有」から「場の共有」、「意志の共有」、「気持ちの共有」、そして「関係の共有」という順に共有様式が現れると予想した。しかし、実際は、友人関係が親密になることに伴い、現れる共有様式が変化していくというよりも、共有様式が多様になっていくことが示唆された。共有している対象は3つに分けて捉えることが出来る。1つ目は「気持ち」、「目標」、「秘密」、「趣味」などを共有する「心

理的な共有」、2つ目はすべての物品を共有する「物質的な共有」、3つ目は「おしゃべり」、「部活動」、「移動行動」を共有する「行動的な共有」である。「行動的な共有」には「負担感」というネガティブな心理的機能が生じる場合がある。しかし、行動的な共有が与える負担感は交友期間によって、ネガティブな心理的機能が生じない場合も考えられる。

第2に、和田（2001）は、関係性と友人関係期待について、旧友人と新しい友人（新友人）に分けて調査している。関係性の調査では「友人の年齢、関係持続期間、友人と会うのに要する時間、過去4か月間で友人と会った回数」を、友人関係期待の調査では「協力、情報、類似、自己向上、敏感さ、共行動、真正さ、自己開示、尊重、相互依存」の10領域を0から9点で得点分けをした。その結果、旧友人とは、さほど頻繁に会えていないが、自己開示と真正さを期待していた。一方、新友人とはよく会うが、旧友人ほど心のつながりができているわけではなく、協力したり、一緒に行動したりすることを期待していることが明らかになった。

第3に、中川・長塚ら（2010）の調査により以下のことが明らかになっていた。

まず、29歳以下は、一人で食事をする個食が多い。しかし、「食事の目的」の結果は29歳以下では「会話」という回答が42%と30歳以上より14ポイントも高い。

日常生活で個食が進んでいる20代でも、誰かと共に食事をして、コミュニケーションをとりたいという欲求は高いことが明らかになった。

3 仮説の構築

先行研究から、留学生、日本人は互いに交友関係を築きたいと望んでいるが、言語・文化の違いからコミュニケーションがうまく取れずに悩んでいる留学生が多いことが明らかになった。ただし、留学生は、コミュニケーションを苦手としながらも「志向的領域」のコミュニケーションは取りに行ってい

る。横田(1991a)は、「留学生は『志向的領域』の話題の中で個人的な意見を交換しようとするため『関係的領域』における日本人の開示には相互性を示さない。」と述べているが、久野(2011)の研究からもわかるように留学生は、信頼の置ける、母国の家族や友人に相談をすることが多い。つまり、日本人と留学生の自己開示に違いが見えても、留学生は日本人の友人を信頼しているからこそ自分の苦手分野をさらけ出し、相談しているとも考えられる。その点を、日本人が理解して付き合うことで、留学生と日本人の交友関係は築きやすくなるのではないだろうか。また、新友人においては行動を共にすることについて、旧友人よりも、負担感を与えることは少ないと考えられるため、交友関係を深めるには協力して、共に長い時間一緒に行動することが有益であると考えられる。さらに、これらの共有の場として適しているのが共食の場であることも明らかになった。

しかし、国籍が異なる人同士が交友関係を築く条件については未だ十分な検討はなされていない。本研究では、同国の人同士が親密になる条件として明らかになっている協力し合うこと、行動を共にすること、一緒に食事をするのが、留学生と日本人という異国の人の間でも条件として成立するかについて調査を実施する。

そこで、「協力し合う場、行動を共有する場、共食の場が存在すれば、留学生と日本人はより親密な関係を築ける」と仮説を立て、研究を進める。

4 仮説の検証

4-1 調査概要

仮説を検証するにあたり、先行研究をもとに、留学生と日本人学生に、物事を共有する場を提供する。

そこで、5つの共有様式をもとに共有する対象を細かく列挙し、共有様式ごとに当てはめ、留学生と日本人学生の親密化には、共有様式の重要性に順位が

あるのか、同国の人同士とは異なる共有様式が親密化に必要なかを検証する。

山川（2013）は、留学生と日本人学生と一緒に生活する混合寮における友人関係についての研究で、一緒に暮らす寮の環境には、以下3つの共有が組み込まれており、3つの共有があるからこそ、混合寮は留学生と日本人学生の友人関係構築の場としてふさわしいと指摘している。3つの共有とは、1つ目は、寮で決められた決まりを互いを守る「ルールの共有」、2つ目は、寮の中で共有できる場所が物質的に設置されている「空間の共有」、3つ目は、部屋や食事作りなどの活動を通して連続した時間を共有する「時間の共有」である。

また、本多・杉山（2021）は、友人と共に入浴することに関しての研究で、友達と入浴することは、友好的な気分を高め、友人との心の距離を縮める働きがあると述べている。

さらに、村上（2005）は、短期留学生、交換留学生を対象として、留学先の人との親密度の違いについて研究をした結果、親密さに影響を与える要因として、接触頻度が高い人と親しくなりやすい傾向があることを明らかにした。毎日接触し、生活のサポートをし合うことで、異文化体験を重ねながら、互いに理解を深め親しくなっていく過程を経る、としている。

以上の、山川（2013）、本多・杉山ら（2021）、村上（2005）の研究を踏まえて、共食や、共に入浴する場面をスケジュールに入れた旅行形態で調査を行った。寮生活のように共同生活をしながら、高坂・池田ら（2011）が友人関係構築に影響を及ぼすとした5つの共有様式「特性の共有」、「場の共有」、「意志の共有」、「気持ちの共有」、「関係の共有」をスケジュールに組み込む。宿泊施設は、参加者4名で1つの部屋を使用できる、「Tanga Table」を選定し、筆者らが、3泊4日のタイムテーブルを細かく作成し、参加者にはタイムテーブルに従って行動してもらう。このタイムテーブル通りに行動することで、山川（2013）の研究における「ルールの共有」を検証出来る。

検証は3つの調査方法に分けて行った。1段階目は、筆者が旅行にサポートスタッフとして同行し、旅行者の様子を実際に見て調査する観察法での調査。

2段階目は、体験後にどの共有で1番コミュニケーションが取れたか、親密化が図れたかを質問紙で調査するアンケート法での調査。そして、3段階目は、アンケート結果より、新たに出た疑問について旅行参加者に直接話を聞くインタビュー調査である。

旅行中の昼食は、参加者同士で弁当を一緒に作って食べる。弁当の内容については、日本の料理と、留学生の母国料理などとし、お互いの国の味付けや、食べ方について、コミュニケーションを取りながら作ることを狙いとする。一緒に作った料理、相手の国の料理と一緒に食べることで、自然と会話が増えて一般的な共食よりもコミュニケーションが取れることが期待できる。

旅行は、2021年3月12日金曜日から15日月曜日の3泊4日で実施した。2回分の弁当作りの食材や、写真講座の受講料を含む企画参加費を1名当たり5000円で予算を組み、それ以外の宿泊費、交通費、朝食と夕食の代金は別料金とした。

3泊4日のスケジュールを共有している対象と、共有様式、共有の種類に対応させて表にした(表1)。

以上の、一緒に弁当を作って、共食をすることで親密化を図ることを目的とした本旅行企画を「留学生が行く SDGs 旅行 BENTO JOURNEY」と名付ける。旅程は下記の通りである。

表1 旅程と各場面での共有項目（2021年3月12日～15日）

共有の種類	共有様式	基本的共有対象(時間・場所・会話)に加えて対象となるもの	実施日	時間	BENTO JOURNEYスケジュール
行動的共有	場	出会い・目的地	1日目	16:00～	小倉集合 宿泊施設チェックイン 町歩き
	場・共食・特性	文化・志向・食事		19:00～	夕食
	場	目的・決まり(コロナ対策)	2日目	8:00～	朝食
				11:00～	ベントウ作り→写真講座・ミッション
		行動・目的地	3日目	9:45～	子ども食堂に向け出発
		目的・決まり(コロナ対策)		10:25～	子どもたちと弁当づくり
行動的共有 心理的共有	共食・場・気持ち	文化・食事	1日目 ↓ 4日目	8:00～ 19:00～	参加者同士による食事
	場・気持ち・関係	文化・ペアの時間	4日目	21:00～	就寝まで参加者同士のおしゃべり
	場・気持ち・意思・関係	目標・文化・ペアの時間		2日目	15:16～ ミッション
	場・気持ち・関係	別れ	3日目	14:10～	子ども食堂弁当づくり終了、解散
	場・意思・気持ち	運動・文化	4日目	10:00～	フリータイム・博物館見学 キャッチボール
	場・気持ち・関係	別れ		17:00	旅行者見送り
行動的共有 心理的共有 物質的共有	場・意思・気持ち・特性	買いもの・お金・ペアの時間・目標	2日目 ↓ 3日目	10:30～	食材買い出し
	場・意思・気持ち・特性・関係	文化・材料・調理器具・メニュー・ペアの時間・目標・知識・志向・趣味		11:15～	弁当づくり（写真講座用・子ども食堂）
	共食・場・気持ち	趣味・志向・味・文化・弁当・食事		14:15～	弁当実食
	場・特性	料理・知識・志向・趣味	2日目	12:45～	盛り付け
		講座・小物・知識		13:00～	写真講座
	共食・場・特性	弁当・行動・趣味・くじ(偶発性)		14:15～	勝山公園で実食、フォーチュンクッキー
	場・意思・特性	行動・目的		18:00～	夜景観賞
	場・気持ち・意思・特性	言語・文化・遊び・お菓子・ステッカー	3日目	13:20～	アクティビティ
	場・気持ち・特性	文化・歴史・味・お茶・お茶菓子		15:50	立礼体験

出所：高坂他（2011）をもとに筆者作成。

注：表内の実施日と年月日の対応は以下となる、1日目：2021年3月12日、2日目：3月13日、3日目：3月14日、4日目：3月15日。

4-2 オンラインでの親密化検証

ここでは「BENTO JOURNEY」の参加者募集から旅行実施前までについて概説する。

募集は、独自のホームページを作成して、SNSでの呼びかけを行いながら、3つの方法で行った。まず、チラシと名刺サイズのカードを作成し、留学生の

在籍者数が多い学校の留学センターや国際センターなどに掲示した。しかし、参加者からの反応が全く無かった為、次に、留学生の生活や就職を支援している団体へ直接連絡して、「BENTO JOURNEY」に興味がありそうな留学生の紹介をお願いしたが、この方法でも、参加者は見つからなかった。最後に、筆者の知人である留学生と日本人に直接、企画を紹介したところ、ベトナム人留学生2名、日本人2名の参加が決まった。

参加者同士は面識が無かったため、旅行の前からオンラインミーティングを行うことで、接触回数を増やし、旅行までに共通の趣味を見つけたり、実際に会ってみたい気持ちを引き出したりした。

形式は、Zoomによるビデオでのオンラインミーティングを4回行い、1回のミーティングは約1時間とする。本来は、4回ともスタッフと旅行者4名の参加を予定していたが、スケジュール調整の結果、第2回目は男子ペアと女子ペアが別日で行った。さらに、女子留学生1名は、第3回と第4回のミーティングにスケジュールの関係で参加が出来なかった。

ミーティングでは、第1回目の冒頭に、全員の自己紹介を行い。それ以降は、事前に旅行内で作りたい料理や行ってみたい場所について参加者に調査を行っていたため、調査用紙に基づいて、スタッフが司会者となり、弁当のメニューやフリータイムでの行き先を中心に話し合いを行った。

吉川(1989)によると、行為者の傾性はポジティブな行為よりもネガティブな行為に影響されやすく、さらに、1回ついてしまった悪印象は好印象よりも覆しにくいとされている。通信環境に左右されやすいZoomでのオンラインミーティングは、会話のテンポがつかめなかったり、相手の話に対しての反応が上手く伝わらなかったりする可能性も有り、無視されたと感じる、愛想がなく悪い印象を与えることも考えられる。

この先行研究を受けて、「BENTO JOURNEY」のスタッフは、オンラインミーティングの際に、笑顔を絶やさず相槌を打つことを事前に注意喚起したうえでミーティングに臨んだ。スタッフは、コロナ禍での企画立案の段階から、

オンラインでの会議を重ねており、適切な声の大きさ、トーンについては、問題が無かったと思われる。さらに、本番のオンラインミーティングでも、笑顔絶やさず、相槌を大きく打ちながら相手の話を聞くこと、そして、拍手や手を振ることにスタッフが率先して取り組んだため、オンラインミーティングの段階では旅行に行くことに不安を持つ人、ペアの参加者とうまく仲良くなれるか心配だという人は見られなかった。

しかし、第1回目のミーティングの際、ベトナム人女子留学生在がビデオをオフにしての参加だったため、当時、ベトナム人女子留学生に対して悪い印象を抱いてしまった可能性もあることから、悪い印象を抱いた場合は、その後印象が好転したか、好転した場合はどの段階で変化したかについてインタビュー調査にて明らかにすることとした。

4-3 旅行全体での共有項目

「BENTO JOURNEY」では、高坂・池田ら（2011）の研究を参考に、①特性、②場、③意思、④気持ち、⑤関係の5つの共有様式を組み込んだ。また、旅行全体の共有項目として、現在、世界で取り組まれているSDGsをトピックとした。SDGsに旅行参加者が一緒に取り組むことは、③意思の共有に当てはまる。SDGsは全17項目あるが、本企画内では、4項目を取り上げた。

1つ目は項目10「人や国の不平等を無くそう」、2つ目は項目12「つくる責任・つかう責任」、3つ目は項目1「貧困を無くそう」、そして、4つ目は項目17「パートナーシップで目標を達成しよう」である。

企画参加前のSDGsについての知識や考え方、そして、企画参加後のSDGsについての考え方やSDGsを「ジブンごと」として捉えることが出来るようになったかを親密化に関するアンケートと同時に調査する。

SDGsは、世界全体の問題であり、国籍の異なる留学生と日本人学生が1つの目標に向かって取り組むことで、目標を共有するという点で、親密化にも良い影響を与えと言える。

まず、1つ目、項目10の「人や国の不平等を無くそう」は、留学生を対象とした旅行企画は存在するが、語学習得を目的としたものが多く、「楽しみ」を目的としたものは少ない。

そこで、留学生が旅行本来を楽しみながら、日本人とも親しくなれる機会を提供することで、人や国の不平等をなくす。

2つ目は、項目12の「つくる責任・つかう責任」である。

筆者らの目的は1人でも日頃から出来るSDGsの取り組みを旅行者に経験してもらうことにあるため、弁当作りにおいては、食材を余らせないことを目標としてレシピを考え、参加者に提案した。例えば、人参は皮をむかずにそのまま使ったり、ピーマンのヘタも細かく刻んで使ったりすることである。

弁当作りを通して「食材廃棄を無くす・減らす」という「目的」を共有しながら、弁当と一緒に作るという「目標」を共有することは、心理的共有の共有様式でいえば「意思の共有」にあたる。手軽に取り組めるこの項目は、SDGsをジブンゴトとして考えるきっかけになると考え、本企画内では2日目と、3日目の両方に弁当作りを盛り込んだ。

参加者同士で、どうしたら食品をすべて使いきれのかという「目的」を試行錯誤あるいは協力しながら、料理を完成させるという「目標」に向かって取り組むことで、親密化が図られるか検証した。

3つ目は、項目1の「貧困を無くそう」である。子ども食堂でのボランティア活動は、子供たちにとっても国籍や年齢が異なる人との触れ合いの機会として貴重であるが、参加者にとっても非常に良い活動となる。

例えば、若年層がボランティア活動に参加する動機として、桜井(2002)は、異なる年齢の人達と一緒に何かをする機会や、日常に無い面白い経験などがあることをあげているが、留学生にとって日本の子どもと触れ合うことは非常に貴重な機会であり、貧困問題がお金に関することだけではないことを理解するきっかけにもなる。

4つ目は、項目17の「パートナーシップで目標を達成しよう」である。「ベ

ントウ・フォト・ランチ」で撮った写真をInstagramに投稿して、その投稿についた「いいね」1つを1円に換算して、「いいね」の合計金額分をSDGs関連企業や団体へ寄付することでSDGsの取り組みに貢献する。

写真やSNSを活用することで、視覚的に楽しく取り組むことができ、「いいね」という数値が寄付金として反映されることで、よりモチベーションが上がると考えられる。また、「いいね」の数が増えるほど、自分が撮った写真が評価されたといえるため、自己肯定感の高まりも期待できる。

5 調査・分析

5-1 観察法

本研究では、観察法とアンケート、インタビューによって調査を行った。観察法での検証について、まず、旅行前のオンラインミーティングでは、ミーティングの最後にスタッフを含む全員が一言ずつ感想を述べる機会を設けていた。その感想の内容からである。第1回目のミーティングでは、旅行内容に関することや旅行内のアクティビティに対して「楽しみ」と発言していたが、ミーティングを重ねるにつれて「早くみんなに会いたい」、「会えるのが楽しみ」など、参加者やスタッフに対して「会いたい」と思うようになっていたことが窺えた。単に、接触回数が増えた他に、ミーティング中に、司会を務めるスタッフが旅行以外の話題を出した際に、参加者同士で共通の趣味やスポーツ経験があることなどが認識できたことも、心の距離を縮める要素になったと考えられる。

次に、旅行中では、初日に参加者同士が初めて会った瞬間は、オンラインミーティングの成果も有り、「会えてうれしい」や「よろしくお願いします」という会話があったが、その後、宿泊施設へ移動する時になると旅行スタッフが質問を投げかけて参加者同士の会話を促したり、参加者同士ではなく、スタッフと参加者で会話をしていたりと、旅行の参加者同士が長く会話を続けられて

いる様子は見られなかった。しかし、食材の買い出しで食品ロスが出ないよう、個数や量をペアで相談しながら買い物をする時間、スタッフが同行しない朝食や夕食の時間を一緒に過ごすことで、最終日には、ベトナム人女子留学生と日本人女性が肩を組んで楽しそうに歩く様子が見られ、初日より、確実に親密化が図られたと考えられる(図1)。



図1 肩を組んで歩くベトナム人女子留学生(左)と日本人女性(右)

5-2 アンケート調査

続いて、旅行後に行ったアンケート調査の結果である。調査の目的は「BENTO JOURNEY」旅行参加者および「ベントウ・フォト・ランチ」、「お弁当交流会」の参加者が旅行内のどの場面で親密化が図れたかを明らかにする。調査期間は2021年4月24日(土曜日)から2021年5月31日(月曜日)までである。調査対象は「旅行参加者」、「ベントウ・フォト・ランチ」、「お弁当交流会」

のそれぞれの参加者である。「旅行参加者」はベトナム人留学生2名と日本人2名合計4名で、有効回答4枚があり、「ベントウ・フォト・ランチ」の有効回答数は6枚、「お弁当交流会」の有効回答数は8枚である。

アンケートの内容は、旅行前のオンラインミーティングから、旅行終了までの間でのコミュニケーションや親密化についての他に、旅行全体の共有トピックとして取り上げたSDGsについても、どのように捉えたかを調査する。

まず、旅行前のオンラインミーティングについて、「ペアの日本人（留学生）とはZoomのみの接触でしたが、最初はどう思いましたか（複数回答可）」と質問をしたのに対し、留学生と日本人それぞれ1名が「何を話したらいいかわからなかった」、日本人1名が「あまり緊張しなかった」、留学生1名が「出会ってすぐ打ち解けた」と答えた。1回目のみ自己紹介をして、それ以降、司会スタッフは楽しい雰囲気を作りながらミーティングを行っていたが、内容はほとんど旅の話だったため、「何を話したら良いか分からなかった」と答えたと考えられる。観察法でも、初日は、会話が途切れる場面が多かったため、オンラインミーティングの時点で、毎回、テーマを決めて参加者の好きなものや趣味などを共有理解する機会を提供できれば、参加者同士で会話が盛り上がったのかもしれない。「寝食を共にすることで今まで知らなかったベトナムの文化や日本との違いを知ることは出来ましたか」という質問に対して、日本人の100%と留学生の50%が「その通りだと思う」と答え、留学生の50%が「そう思う」と答えた。また、「文化の違いを知ることが出来たのはいつですか」と質問したところ、日本人は、旅行全体を通して各場面で異文化を感じていたが、留学生は、「ミッション」と「食事」の2つの場面で文化の違いを感じていた。「ミッション」は「意志の共有」があり、「食事」は「場の共有」、「気持ちの共有」があることから、留学生は特に、親密になる場面であるからこそ、相手との文化の違いを強く感じたと考えられる。

また、SDGsについての調査については、「①SDGsを知っていましたか」という質問に対して日本人の100%、留学生の50%が「少し知っている」、留学生

の50%が「全く知らなかった」と回答した。「②SDGsに興味はありましたか」という質問に対しては、日本人の100%と、留学生の50%が「SDGsに少し興味があった」と答え、留学生の50%は「どちらでもない」と回答した。この結果より、企画への参加動機の1つとして、SDGsへの貢献があったと考えることができる。しかし、留学生の半数は、「どちらでもない」と回答したことから、「BENTO JOURNEY」の「日本人と仲良くなれること」に魅力を感じて参加したことが窺える。

企画参加前と参加後のSDGsのイメージについても質問をした。留学生の34%、日本人の67%が「最近よく耳にする」と回答した。しかし、留学生からは「難しい」、「自分の力では貢献出来ない」、日本人からは「世界規模の問題」など、良いイメージや個人でも取り組めるというイメージを持っていなかったことが明らかになった。旅行を通じてSDGsへの認識が変化したかを調査するために、「企画参加前と後でSDGsへのイメージは変わりましたか」と質問したところ、日本人と留学生の半数以上が「変わった」と回答した。しかし、留学生50%が「どちらでもない」と回答していたため、インタビュー調査の際に、再度、質問することとした。さらに、旅行内で行ったSDGsの取り組みについて最も有効だと思った取り組みについても質問したところ留学生と日本人のそれぞれ50%が、留学生に向けた本旅行企画が「人や国の不平等なくそう」に貢献すると回答した。また、同じく留学生と日本人の50%がInstagramで「いいね!」の数をSDGs関連企業へ寄付する企画が「パートナーシップで目標を達成しよう」に貢献すると答えた。一方、「つくる責任・つかう責任」については、食品ロスが少ないことが誰かのためになっていることが目に見えないため、実際にSDGsに繋がっていることを実感しづらいことから、身近に取り組めるにもかかわらず、評価が低かった。なお、ベトナム人女子留学生は、評価の高かった寄付行為を、実際に個人でも取り組んでいた。

5-3 インタビュー調査

アンケート調査をもとに、さらに、旅行参加者4名にインタビュー調査を実施した。電話とZoomによるリモート形式で行い、調査期間は2021年9月14日火曜日から9月23日木曜日の間で、1名ずつ行った。

・質問内容

Q1. 対話内容について

最初に、Q1-(1)参加者同士の対話内容について、以下の質問項目において他の参加者とどの程度話しをしたかを0（全く話してない）～9（十分に話し、全て打ち明けた）で点数化してもらった。①将来（進路の迷い・自信・不安）②目標（生き方・現在の目標）③勉強（学問的興味・勉強の仕方）④大学（授業について・学校生活のこと）⑤趣味（音楽・スポーツ・ショッピング）⑥意見（最近の出来事や政治）⑦人間（友人やバイト先での人間関係について）⑧異性（恋愛経験や恋愛の悩み）⑨心傷（恥ずかしかった出来事・失敗）⑩身体（身体の健康・美容）⑪家庭（親への不満・家族の話）⑫性（体験・関心）以上12項目である。

次いで、Q1-(2)その中で具体的に話した会話の内容を聞き、最後に、Q1-(3)としてQ1-(2)の会話は主に旅行中のどの場面で行ったかを尋ねた。

Q2. ミッション内容について

「目標」の共有があったミッションと、無いミッションで、よりコミュニケーションが取れたと思うミッションと、その理由について検証する。ミッションの内容は、男子ペア①マンホールコレクト（目標有り）②TOTOミュージアム、女子ペア①魚町銀天街しりとり（目標有り）②辻利である。

それぞれのミッションについて、①マンホールコレクトは、魚町銀天街周辺にあるデザインマンホールを9種類見つけて写真に撮るミッションである。②TOTOミュージアムは、TOTO株式会社が設立した博物館で、日本の近代化と

共に発展した水まわりの技術や製品・サービスの進歩を実際の製品展示を見ながら学ぶミッションである。③魚町銀天街しりとりは、魚町銀天街にあるものを使ってしりとりを20回続けるミッションである。④辻利は、魚町銀天街内にあるお茶屋「辻利茶舗」で抹茶や甘味をいただくミッションである。

Q 3. Zoom ミーティングについて

Q 3-(1). 旅行前に参加者同士の関係を深めるために行ったZoom（第1回目）でベトナム人女子留学生が顔を隠して参加したことについてどのように思ったか。Q 3-(2). Q 3-(1)で良い印象を持たなかった人への質問で、第2回からは、顔を映して参加したが印象は好転したか。好転した場合は、いつ印象が良くなったかを、印象が良くならなかった人はその理由を尋ねた。また、Q 3-(3)第1回目のオンラインミーティングでビデオをオフにして参加したベトナム人女子留学生に、その理由を尋ねた。

Q 4. SDGsについて

アンケート調査で、旅行参加後にSDGsに対するイメージの変化を質問したところ、ベトナム人女子留学生、日本人男性、日本人女性は、旅行に参加したことで、SDGsを「ジブンごと」として捉えるようになり、個人でも取り組むことが出来るように印象が変わったと回答した。一方、ベトナム人男子留学生は、旅行参加後も「SDGsは世界規模の問題である」と回答した。そこで、ベトナム人男子留学生には、どの点が世界規模の問題だと思ったかについてインタビューを行った。

・分析・考察

Q 1について、横田(1991a)は、各開示項目の内容から、①将来～⑥意見を「志向的領域」、⑦人間関係～⑫性を「関係的領域」と名付けた。さらに、「関係的領域」は「志向的領域」よりも比較的開示されにくい、交友関係の発展

に期待ができると考え、それぞれの参加者から他者に対する自己開示結果を分析する。まず、ベトナム人男子留学生は、「志向的領域」において、③勉強以外は参加者3名に対して同じように深く自己開示している。一方、「関係的領域」において、⑦人間関係は、日本人男性にのみ深い開示を行っていたことが明らかになった。さらに、⑧異性の項目では、参加者3名に対して、開示の程度にばらつきが見られた。⑦人間関係は、同性である日本人男性、⑧異性は、同国であるベトナム人女子留学生に最も開示していることから、ベトナム人男子留学生にとって、1番自己開示が進んだのは、ベトナム人女子留学生であり、次いで、日本人男性だと考えることが出来る（図2）。

次に、ベトナム人女子留学生は、参加者3名に対して全ての項目で同じように開示していることが明らかになった。「関係的領域」の⑨心傷と⑪家庭の項目の開示が他の項目に比べて低く、⑫性については、参加者3名が0と点数づけているのに対し、ベトナム人女子留学生のみ開示したと回答している（図3）。

一方、日本人男性は、「関係的領域」において、③勉強は日本人女性、④学校はベトナム人女子留学生へのみ開示が浅かった。企画に参加した日本人女性は、学生ではなく社会人であるため、学校の話はしても、学問的興味などについてまでは話さなかったのではないと思われる。「関係的領域」において、⑦人間関係と⑧異性の項目で開示の程度に差異が見られた。ベトナム人男性との「関係的領域」での自己開示が他の2名に比べて進んでいないため、あまり深い話が出来なかったことが想定される。しかし、横田（1991a）は、自己開示の深まりが、必ずしも親密化の結果になるとは限らず、親密になるための手段として、開示の量や深さを開示者自らがコントロールをして、親密になっていくこともあると指摘していることから、異性の2名とコミュニケーションが上手く取れていないと感じた結果、日本人男性は「関係的領域」において自ら深い自己開示を行うことで親密化を図ったとも考えられる（図4）。

最後に、日本人女性は、「関係的領域」において、他の参加者への開示の程

度に差異があった。⑧異性と⑪家庭の項目でベトナム人女子留学生に深い自己開示を行っている。⑫性においては、ベトナム人女子留学生に対しても開示していなかった。一方、ベトナム人女子留学生は⑪家庭の開示をせずに、⑫性で開示していると回答していた。いずれも、最も開示が行われにくい項目であったため、日本人女性とベトナム人女子留学生、特に、お互いが深い自己開示をしたことが明らかになった(図5)。

関係的領域の⑦人間関係の領域の開示は、異国の相手よりも同国間の方が行われており、ベトナム人留学生については日本ではなくベトナムでの交友関係や、旅行中に連絡を取っていた友人について話をしたと回答があった。留学生は友人関係を聞かれることはあまりなく、母国の家族関係や家族構成に関する、自己開示をして話が盛り上がったといえる。その他にも、⑧異性では、恋人や好きな人の有無やその人のどのようなところに惹かれているかなどのお話をしたと回答した。これらの会話は、宿泊施設で参加者だけの空間になったときに行ったと話しており、時間を共有する、会話を共有するだけでも深い自己開示が促進され、親密化が図られることが明らかになった。

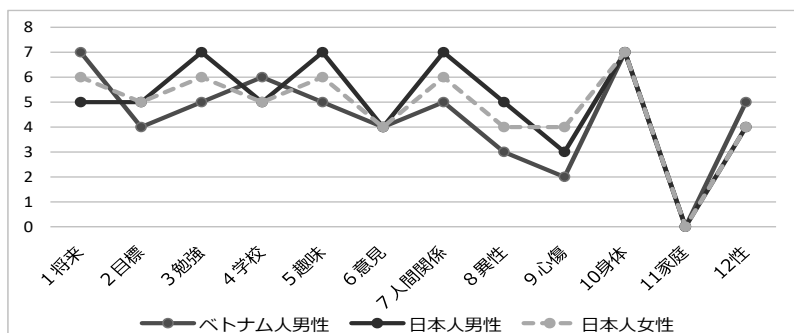


図2 ベトナム人女子留学生から他者に対する自己開示結果
出所：筆者作成。

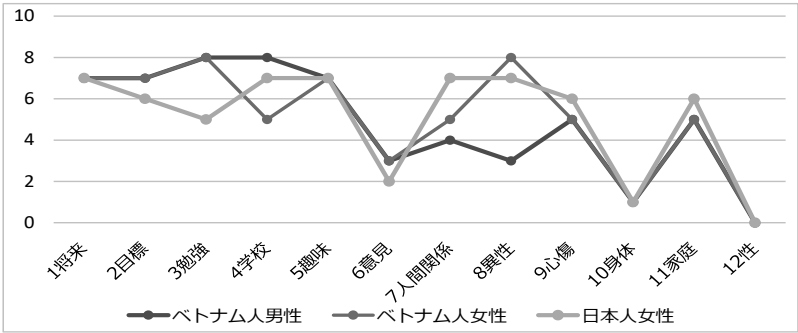


図3 日本人男性から他者に対する自己開示結果
出所：筆者作成。

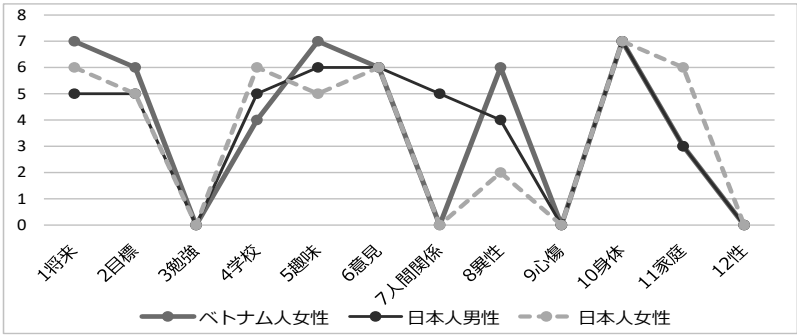


図4 ベトナム人男子留学生から他者に対する自己開示結果
出所：筆者作成。

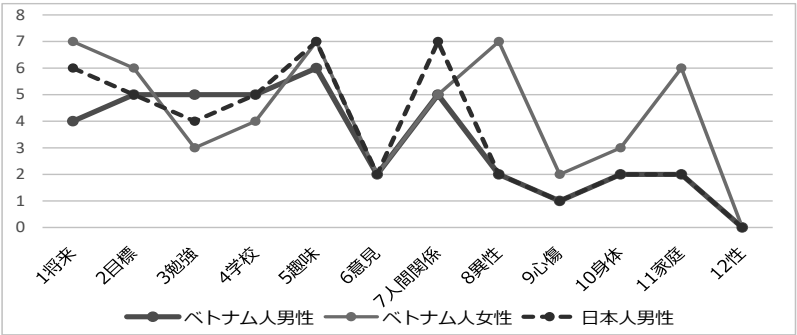


図5 日本人女性から他者に対する自己開示結果
出所：筆者作成。

Q2. コミュニケーションが取れたと思うミッションについては、参加者4名全員が目標の共有があるミッションであると答えた。

その理由として、マンホールコレクトでは9種類の図柄を集める、魚町銀天街しりとりでは20か所の名所で言葉をつなぐというノルマが設定されていたため、達成するために自然と会話が増えたことをあげ結果として、力を合わせてこなしただけで絆を感じたと回答している。また、目標の無いミッションでも会話はあるが、朝食や夕食、移動時間などに目標設定がないため、特に、親密化が図れたという実感は得られなかったと考えられる。

第1回のオンラインミーティングでベトナム人女子留学生がビデオをオフにし、顔を出さずに参加したことに対して、他の3名は特に悪い印象を抱けなかったが、日本人男性は、「表情や反応が分かりづらかったため、出来ればビデオをオンにして参加して欲しかった。」と回答した。また、日本人女性は、「ビデオをオンにしてほしいとスタッフが呼びかけることで、雰囲気が少しピリッとした気がしたが、ベトナム人女子留学生も理由があってビデオをオンにできないのだろうと思った。」と回答した。日本人男性と日本人女性のいずれも、ベトナム人女子留学生に対して、悪い印象を抱くことはなく、第2回目以降はビデオをオンにしての参加だったため、日本人女性は「一緒に旅をする人の顔が見えて不安が無くなった。早く一緒に旅行したいと思ったから。」と話した。

一方、ベトナム人女子留学生には、第1回目のオンラインミーティングでビデオをオフにして参加した理由を聞いたところ、「身だしなみが整っていなかったから。」と答えており、ベトナム人女子留学生から、スタッフや他の参加者に対して、特別、何かを訴えたかった訳ではなかった。万が一、第2回目以降も顔を出さずに参加を続けていたとすると、日本人女性が感じたように、悪い印象だけではなく、一緒に旅行に行くことへの不安も増えたと考えられる。

Q4. ベトナム人男子留学生への追加質問で、企画参加後のSDGsイメージについて「SDGsは世界規模の問題だと思った」とアンケートで回答してい

たことに、筆者らは、SDGsは世界的に取り組むべき課題であるため、個人の力では何も変えられないと思ったのではないかと予測した。しかし、実際は、「BENTO JOURNEY」に参加し、写真講座で自分が撮った写真が、NPO法人ブリッジエーシアジャパンを通して、ベトナムの子ども達を支援する力になることを知り、この活動は世界に発信できるものだと考えたからだという。

また、「お弁当交流会」では、生活に困っている人が少ないと思っていた日本で「子ども食堂」の存在とその意味を知り、思っていたよりも沢山の子どもが利用していたことに驚いたと答えた。そこで、SDGsは先進国や貧富の差が少ない国も含めて、世界で取り組むべき問題だと実感し、認識を変えたという。

6 結論

本研究では、国籍が異なる人同士が親密になる条件を明らかにすることを目的として、留学生と日本人学生を対象に、親密になるにはどのような条件が重要かについて検討した。

留学生と日本人学生の間でもどのような「共有」が親密化に影響を与えるのかを検証すべく、「共行動や共同活動をしながら心理的に共有する場が存在すれば、留学生と日本人はより親密な友人関係を築けるのではないか」という仮説を立てて研究を進めた。

先行研究より面識のない人同士が親密化を図るには、まず、行動を共にしたり、接触頻度を高めたりすること、次に、心理的共有や共食の場を提供することが有益であると考え、仮説を検証するにあたり、2組の留学生と日本人のペアに旅先で弁当を作るアクティビティやミッションを含む3泊4日の旅「BENTO JOURNEY」を提供した。

1段階目の観察法による調査結果では、旅行最終日には国籍の異なる留学生と日本人が肩を組んで街中を歩く様子も見受けられ、旅行の中で親密化が図れたことが確認できた。

次に、2段階目のアンケート調査では、一緒に食事をする、一緒に料理をする、ミッションに取り組むことが親密化に良い影響を及ぼしていることが明らかになった。食と料理といったミッションの共有では、「美味しい」、「ミッションをクリアしたい」という「気持ち」を共有され、力を合わせて料理を作ったことでミッション達成の「目標」を共有することができ、心理的な共有が生まれたことが認められた。特に、国籍が異なる人同士の食の共有は、異文化を互いに理解しながらコミュニケーションが促進されることが示された。

最後に、3段階目のインタビュー調査では、旅行参加者それぞれとどのような項目で、どの程度、会話をしたかを中心に質問したところ、全体的に親密化に良い影響を与える「関係的領域」において、国籍が異なる人同士では人間関係や家庭について、さらに、国籍の異なる女子同士では家庭や性の領域について男性よりも自己開示が進み、より深い親密化が図られたことも明らかになった。

以上、観察法、アンケート調査、インタビュー調査3つの調査より、「協力し合う場、行動を共有する場、共食の場が存在すれば、留学生と日本人はより親密な関係を築ける」という仮説は支持されたと言える。

本研究では、筆者らが、細かくタイムスケジュールを立てて参加者に行動してもらったことで1つ発見があった。それは、決められたタイムスケジュールに従って行動すること、つまり、個人で勝手に行き先を決めて行動しないことは、参加者同士が常に行動を共にして、協力する場面を共有するための前提条件となったことである。タイムスケジュール通りに行動することは、山川(2013)が、混合寮の要素として挙げた「ルールの共有」に当たるといえる。観光の視点から見ても、吉田(2011)は、団体旅行やパッケージツアーでは、個人旅行よりも、旅行仲間とおしゃべりが旅行内の価値として大きいと述べているが、一見、「BENTO JOURNEY」もフリータイムが少なく、窮屈に見えるパッケージツアーだが、参加者自身で行き先を調べたり、時間を管理したりするストレスが無い、弁当作りやミッションを心から楽しむことが出来たと

推察できる。また、結果として、会話の内容にしても、旅行の話よりも相手に関する話題が中心になり、親密化を図ることができたといえよう。

また、2030年の達成を目標とするSDGsへもさらに力を入れて取り組む必要があるが、「BENTO JOURNEY」で実施した、SDGsを「ジブンごと」として捉える試みを、今後もSNSやイベントなどで提供し啓発していくことができれば、一人でも多く人が日頃の生活からSDGsを意識して、マイバックを持ち歩いたり、リサイクルショップに不用品を持って行ったりする生活に変わるのでないだろうか。人々に「楽しみ」を提供できる観光産業には、その力があると確信している。

7 今後の展望

本研究での最大の反省点は、本研究の基盤となる文献レビューにおいて、参考文献が日本人同士の親密性に関する研究に偏ってしまい、国籍が異なる人同士についての調査、文献を探しきれなかったことである。また、本研究の調査では、留学生が2名ともベトナム人だったが、欧米やアジアでは、親密化の条件が大きく異なる可能性もある。

さらに、新型コロナウイルスが蔓延している状況下での調査だったため、食事の際に、参加者に黙食をお願いしたことで、本来のコミュニケーションをとりながらの食事について、十分に調査できなかった点も今後の課題である。

留学生と日本人が友人関係を築くためには、一緒に旅をする企画を提供すればいいという単純なことではない。例えば、本研究の結果からも示唆されるように、旅する中で双方の交流を深めるためには、参加者としてどのような決まりや役割分担が必要か、どのようなタイミングが必要か、どのような共通の目標を持つ活動が必要かなど、「ルールの共有」、「空間の共有」および「時間の共有」の視点から考慮すべき点は多々ある。以上のような点に留意し、留学生と日本人が友人関係を構築できるような環境を作っていくことが重要といえよ

う。

今回は、福岡県北九州市で「BENTO JOURNEY」を行ったが、今後は、「BENTO JOURNEY」を全国に展開することでSDGsに貢献しながら、多くの留学生と日本人が親しくなれる機会を提供し、異文化交流を深めることで留学生を取り巻く環境と旅行業界にイノベーションを起こしていきたい。

【引用文献】

- 伊藤春子・比留間洋一 (2019) 「私費外国人留学生の特徴—アルバイトに関する意識実態調査から—」『星城大学研究紀要』19巻、29-36.
- 梶原雄 (2020) 「日本人学生は外国人留学生をどうしているか—同志社大学の日本人学生からの視点」『同志社大学日本語・日本文化研究』、93-111
- 高坂康雅・池田幸恭・葉山大地・佐藤有耕 (2011) 「青年期の友人関係を理解するための観点としての共有研究の展望と課題 —榎本淳子氏・大谷宗啓氏のコメントに対するリプライ—」『青年心理学研究』、193-197.
- 桜井政成 (2002) 「複数動機アプローチによるボランティア参加動機構造の分析—京都市域のボランティアを対象とした調査より—」『ノンプロフィット・レビュー』2 (2)、112-122.
- 志甫啓 (2015) 「外国人留学生の受入れとアルバイトに関する近年の傾向について」『日本労働研究雑誌』57 (9)、98-115.
- 高井次郎 (1994) 「日本人との交流と在日留学生の異文化適応」『異文化間教育』8、106-116.
- 田中共子 (2003) 「日本人学生と留学生の対人関係形成の困難に関する原因認知の比較」『学生相談研究』24 (1)、41-51.
- 中川李子・長塚未来・西山末真・吉田義明 (2010) 「共食の機能と可能性 —食育をより有効なものにするための一考察—」『緑と食の科学』64、55-65.
- 久野弓枝 (2011) 「留学生が抱える不安や問題とそのサポートについて—札幌大学の留学生に対する質問紙調査とインタビュー報告—」『札幌大学総合論叢』31、55-74.
- 平野吉範・田島博之 (2017) 「LINE利用状況に着目した留学生のコミュニケーションの実態調査」『第79回全国大会講演論文集』情報処理学会2017 (1)、825-826
- 本多明生・杉山歩 (2021) 「友人との温泉入浴による共同体験効果」『静岡理工科大学紀要』29、41-44.
- 村上律子 (2005) 「アメリカ人留学生のソーシャル・ネットワークとホストとの親密化—支援制度による接触を中心に」サウクエン・ファン・遠山千佳・徳永あかね・堀内みね子・村上律子『外語大における多文化共生：留学生支援の実践研究』神田外国語大学.
- 森尾貴広 (2018) 「「KOSHUKAI」—ブラジルにおける帰国留学生による渡日前オリエンテーションの取組—」『留学交流』93、26-32.
- 山川史 (2013) 「寮に住む留学生と日本人学生の友人関係構築に関する事例研究」『異文化間教育』38、100-115.

- 横田雅弘 (1991a) 「自己開示からみた留学生と日本人学生の友人関係」『一橋論叢』105 (5)、629-647.
- 横田雅弘 (1991b) 「留学生と日本人学生の親密化に関する研究」『異文化間教育』5、81-97.
- 吉川肇子 (1989) 「悪印象は残りやすいか？」『実験社会心理学研究』29 (1)、45-54.
- 吉田春生 (2011) 「観光マーケティングと経験経済・経験価値」『鹿児島国際大学福祉社会学部論集』30 (3)、1-19.
- 和田実 (2001) 「性、物理的距離が新旧の同性友人関係に及ぼす影響」『心理学研究』72 (3)、187-193.

【参考文献】

〈論文〉

- 荒井俊行 (2016) 「大学生のボランティア活動へのイメージが参加志向動機・不参加志向動機に及ぼす影響」『日本教育工学論文誌』40 (2)、85-94.
- 石井雅章 (2020) 「システムから捉えるSDGsの「自分ごと化」のフェーズ」『共生科学』11(11)、66-79.
- 岡田努 (2014) 「青年期の友人関係における「共有」の意味について」『青年心理学研究』25 (2)、157-160.
- 織田杏里・松島生幸・稲垣応顕 (2020) 「ボランティアスタッフにおける自己変容への意識に関する一考察—子ども食堂での福祉実践を通して—」『上越教育大学研究紀要』40 (1)、23-32.
- 高坂康雅・池田幸恭・葉山大地・佐藤 有耕 (2010) 「中学生の友人関係における共有している対象と心理的機能との関連」『青年心理学研究』22、1-16.
- 田中共子・藤原武弘 「在日留学生の対人行動上の困難：異文化適応を促進するための日本のソーシャル・スキルの検討」『社会心理学研究』7 (2)、92-101.
- 平井美佳 (1999) 「『日本人らしさ』についてのステレオタイプ」『実験社会心理学研究』39 (2)、103-113.
- 茂戸藤恵 (2012) 「留学生との交流による日本人学生の変容—海外勤務志向への変化に着目して—」『研究紀要 Works Review』7 (2)、1-14.
- 和田実 (1993) 「同性友人関係：その性および性別タイプによる差異」『社会心理学研究』8 (2)、67-75

〈Webサイト〉

- KOBOL ウェブサイト「SDGs目標12【つくる責任 つかう責任】企業の取り組み事例で実践的に理解！」(<https://spacekobel.com/sdgs/case/sdgs12-and-case>) 2021年10月30日最終確認.
- 独立行政法人日本学生支援機構「2020(令和2)年度外国人留学生在籍状況調査結果」(<https://www.studyinjapan.go.jp/ja/statistics/zaiseki/data/2020.html>) 2021年12月6日最終確認.